

**友人の数と孤独感の関連**  
 -あいさつのタイプと友人の数の関連-

A 班 ○A09CB055 A09CB057 ○A09CB067  
 A08CB023 A08CB133

**問題**

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震の折、一般企業はCMの放送を自粛した。そのCM枠の空きを埋めるために公益社団法人ACジャパンのCMが繰り返し放送されていたことは記憶に新しいことである。特に“あいさつ”を題材にしたアニメーションのCMはtwitterや動画投稿サイトで多く取り上げられていたことから印象深く、人々の関心を集めていたことがわかったと考えられる。

さて、そのCMで歌われていた歌詞には「あいさつすると ともだちふえるね」という一節がある。あいさつとは、高橋(2008, 2009)によれば禅家の問答から発生したものでコミュニケーションの手段として最初に用いる重要な役割があると考えられる。また、野村(1988)によると「挨拶が両者の位置関係を相互に承認確定し、その後展開する関係を円滑にするためのものである」とある。このことから「あいさつすると ともだちふえるね」というのは正しいのではないかと思われるが、果たしてそれは本当なのだろうか疑問に思われる。そこで「あいさつすると ともだちふえるね」を「よくあいさつをする人は友人が多い」と置き換え、友人が多い人物を特定するために山根(1960)や高坂(2010)の研究を参考にして「活動性」・「優しさ」・「信頼性」・「社会性」(項目の因子分析後、「社交性」・「同調性」・「誠実性」・「感情コントロール」に改訂)の4つの下位尺度から成る「友人が多い人物尺度」を作成した。この友人が多い人物尺度と改訂版UCLA孤独感尺度日本語版(諸井, 1991)を用いて友達の数が多いか少ないかが孤独感にどのように関連するのかを調査することを研究テーマの1つとした。

また、「あいさつすると ともだちふえるね」という一節のとおりA「道で全く知らない人にあいさつをする」、B「道で全く知らない人からあいさつされたらあいさつを返す」という項目に両方とも「する」と答えるような能動的にあいさつをする人の場合は友人が多く、B「道で全く知らない人からあいさつされたらあいさつを返す」がA「道で全く知らない人にあいさつをする」に「しない」と答えるような受動的にあいさつのみをする人の場合は能動的にあいさつをする人に比べて友人が少なくなる傾向があるのではないかと考えられる。よって、A「道で全く知らない人に自分からあいさつする」、B「道で全く知らない人からあいさつされたらあいさつを返す」という2項目を4件法で質問し、「あいさつする群」と「あいさつしない群」の2分類で分けたものをタイプⅠ「A能動的あいさつ有 - B受動的あいさつ有=能動型」(以下A - Bに略)、タイプⅡ「A有 - B無=矛盾型」、タイプⅢ「A無 - B有=受動型」、タイプⅣ「A無 - B無=拒否型」の4タイプに分け、あいさつのタイプによって友人の数に相違があるかを調査することも本調査の1つのテーマとした。

**目的**

本研究では友人の多いか少ないかによって孤独感がどのように相違するかを友人の多い人物尺度と改訂版UCLA孤独感尺度日本語版(諸井, 1991)を用いて調査し検討することを目的とした。さらに、A「道で全く知らない人に自分からあいさつする」、B「道で全く知らない人からあいさつされたらあいさつを返す」という2項目を用いてあいさつの仕方を能動型・矛盾型・受動型・拒否型の4タイプに分け、各タイプで友人の数に相違がみられるかを調査し検討することを目的とした。

**仮説**

友人が多いほど孤独感は弱くなると仮説を立てた。また、友人の数は「能動型>受動型>拒否型」になると仮説を立てた。

## 方法

調査対象者 S大学の女子大学生(18~24歳)107名を対象に質問紙調査を行った。このうち有効回答数は102名で、有効回答率は95.33%であった。

調査日時 2011年6月15日(水)の14:30~14:50に20分間で行った。

調査実施場所 S大学Nキャンパスの2号棟403号室にて行った。

調査用具 質問紙(あいさつについての質問2項目、友人が多い人物尺度、改訂版UCLA孤独感尺度日本語版(諸井, 1991)を合せたもの)、筆記具を用いた。

質問紙の構成 質問紙はあいさつについての質問2項目、友人が多い人物尺度、改訂版UCLA孤独感尺度日本語版(諸井, 1991)にて構成した。

まず、「あいさつをする群」と「あいさつをしない群」に分ける為にA「道で全く知らない人に自分からあいさつする」、B「道で全く知らない人からあいさつされたらあいさつを返す」の2項目の質問を構成した。項目Aは能動的あいさつ、項目Bは受動的あいさつを測定するものである。各項目に対し1=「しない」、2=「ときどきする」、3=「よくする」、4=「いつもする」の4件法で行ってもらったものとした。各項目で1を選んだものを「あいさつしない群」、2・3・4を選んだものを「あいさつする群」に分類し、さらにタイプI「A能動的あいさつ有-B受動的あいさつ有=能動型」(以下A-Bに略)、タイプII「A有-B無=矛盾型」、タイプIII「A無-B有=受動型」、タイプIV「A無-B無=拒否型」に分類した。なお、タイプII「A有-B無=矛盾型」は能動的あいさつはするが受動的あいさつはしないという矛盾した回答となるので分析から除外した。また、質問項目を表1に示した。

表1. 能動的あいさつと受動的あいさつに関する質問項目

項目番号	項目
A.	道で全く知らない人に自分からあいさつする
B.	道で全く知らない人からあいさつされたらあいさつを返す

次に友人が多い人物を特定するため①「活動性」、②「優しさ」、③「信頼性」、④「社会性」の4つの下位尺度を想定し「友人が多い人物尺度」を作成した。本尺度は各下位尺度に10項目、全40項目から成る質問紙である。また、逆転項目は★印で表わした。なお、各項目に対し1=「あてはまらない」、2=「ややあてはまらない」、3=「どちらともいえない」、4=「ややあてはまる」、5=「あてはまる」の5件法で行ってもらった。また、友人が多い人物尺度の質問項目を表2に示した。

表2. 友人が多い人物尺度の質問項目

項目番号	項目
①	活動性
1	私は、ハキハキと話す
2	私は、自分の意見を言うことができる
3	私は、初対面の人と気兼ねなく話すことができる
4	私は、笑顔であることが多い
5	私は、リーダーシップをとるのが好きである
6	★私は、いつも疲れている
7	★私は、交友関係の幅が狭い
8	★私は、感情を表すのが苦手である
9	★私は、人見知りをする
10	★私は、人の意見に流されやすい
②	優しさ
11	私は、気遣いができる
12	私は、どんな人にも優しくできる
13	私は、よく相談に乗る

- 14 私は、聞き上手である
- 15 私は、相談されると放っておけない
- 16 ★私は、誰にも頼りにされていない
- 17 ★私は、人の気持ちを理解することができない
- 18 ★私は、約束を破られたらどんな理由があっても許せないほうである
- 19 ★私は、人の意見を聞かず自分の意見を優先するほうである
- 20 ★私は、友達が困っていても、私には関係ないと思うときがある
- ③ 信頼性
- 21 私は、自分が約束を破ることは耐えられない
- 22 私は、誠実でいることが大切だと考える
- 23 私は、仕事や頼まれたことをしっかりやる
- 24 私は、物事を論理的に対処できる
- 25 私は、真面目である
- 26 ★私は、友達との約束があっても恋人との約束を優先させる
- 27 ★私は、遅刻をする
- 28 ★私は、友達からの相談事はめんどくさいと考える
- 29 ★私は、友だちよりも自分が大切である。
- 30 ★私は、目を見て話すのが苦手である
- ④ 社会性
- 31 私は、人との衝突を避ける
- 32 私は、友達の感情を割とよく感じとる
- 33 私は、その場にあった感情表現ができる
- 34 私は、周りや調和が乱れないようにする私は、友達とはどんなことでも共有する
- 35 私は、人とのつながりを大切にしている
- 36 ★私は、主観的(自己中心的)に物事をみる
- 37 ★私は、自分の思い通りにいかないとイライラする
- 38 ★私は、友達といるときに自分の感情を抑えられないことがある
- 39 ★私は、つらいことがあると人前でも泣いてしまう
- 40 ★私は、つらいことがあると他人の力に頼りすぎる

★は逆転項目とした。

次に、改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版(諸井, 1991)は 20 項目からなり、この尺度は一般的な孤独感を測定する尺度である。また、逆転項目を★印で表わした。なお、各項目に対し 1=「けっして感じない」、2=「どちらかといえば感じない」、3=「どちらかといえば感じる」、4=「たびたび感じる」の 4 件法で行ってもらった。また、改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版(諸井, 1991)の質問項目を表 3 に示した。

表 3. 改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版(諸井, 1991)の質問項目

項目番号	項目
1	★私は自分の周囲の人たちと調子よくいつている
2	私は、人との付き合いがない
3	私には、頼りにできる人が誰もいない
4	★私は、ひとりぼっちではない
5	★私は、親しい仲間たちのなかで、欠くことのできない存在である
6	★私は、自分の周囲の人たちと共通点が多い
7	私は、今、誰とも親しくしていない
8	私の趣味や考えは、周囲の人たちとはちがう
9	★私は、外出好きの人間である

- 10 ★私には、親近感の持てる人たちがいる  
 11 私は、無視されている  
 12 私の社会的なつながりはうわべだけのものである  
 13 私をよく知っている人は誰もいない  
 14 私は、他の人たちから孤立している  
 15 ★私は、望むときにはいつでも、人と付き合うことができる  
 16 ★私には、私を本当に理解してくれる人たちがいる  
 17 私は、大変引っ込み思案なのでみじめである  
 18 私には、知人はいるが私と同じ考えの人はいない  
 19 ★私には、話しかけることのできる人たちがいる  
 20 私には頼りにできる人たちがいる

★は逆転項目とした。

手続き 質問紙を配布し、集団法を用いて調査を実施した。まず、「授業時間の貴重な時間を割いて調査協力していただきありがとうございます。」という調査協力への感謝のあいさつをした後に質問紙を配り、配り終えてから「今回の調査はあいさつと友人の数の関連、あいさつの質による友人関係と孤独感の関連を調べることを目的としたものです。」という調査の目的、「今回の調査で得られたデータは安立先生の演習 I の授業以外で使用することはありません。また、調査は匿名で行われるため個人が特定されることはありません。分析後データは処分させていただきます。」というプライバシーの保護、「調査結果の取り扱いには細心の注意を払わせていただきます。」という調査結果の取り扱い、「質問紙の表紙に年齢を書き、説明文を読みながら自分に最も該当する番号に丸をつけてください。」という質問紙の答え方を説明した。その後、調査依頼を承認した対象者にのみ回答を行ってもらった。「回答が終了された方は記入漏れがないか確認後、お手数ですが前に持ってきてください。」と教示して回答が終了次第教壇に提出してもらい、最後に「今回は調査協力していただきましてありがとうございました。」という調査協力に対するお礼を述べた。

## 結果

### 1. 女子大学生の友人が多い人物尺度の因子分析

まず、友人が多い人物尺度の 40 項目の平均値、標準偏差を算出し項目分析を行った。次に、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。4 因子に設定した結果、累積寄与率が 12.71、22.53、29.32、35.21…であった。4 因子構造では累積寄与率が 35.21 と十分でないように思われたが、因子のスクリープロットの図に示された変動と照らし合わせた結果、4 因子構造が妥当であるとした。次に再度 4 因子構造で主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。主因子法・Promax 回転による因子分析の結果、因子負荷量が .35 以上それに満たなかった 10 項目「私は、人の目をみて話すのが苦手である」「私は友達とどんなことでも共有する」「私は誰にも頼りにされていない」「私は友達よりも自分が大切である」「私はいつも疲れている」「私は、人との衝突を避ける」「私は、交友関係の幅が狭い」「私は遅刻をする」「私は相談されると放っておけない」「私は感情を表すのが苦手である」を除外した。また、「私は、仕事や頼まれたことをしっかりやる」の項目は社会性因子と誠実性因子の両方で .35 以上であったため、除外した。

まず第 1 因子は 12 項目で構成されており、「私は、ハキハキと話す」、「私は、笑顔であることが多い」、「私は、どんな人にも優しくできる」、「私は、初対面の人と気兼ねなく話すことができる」など、他者と積極的に交流できる能力を持っていることを示す項目が高い因子負荷量を示していた。よって、第 1 因子を「社交性」因子と命名した。

次に第 2 因子は 8 項目で構成されており、「(逆転項目)私は、人の気持ちを理解することができない→私は、人の気持ちを理解できる」、「(逆転項目)私は、友達が困っていても、私には関係ないと思うときがある→私は、友達が困っていたら自分のことのように思うときがある」など、他者の気持ちを同調しようとする性質を示す項目が高い因子負荷量を示していた。よって、第 2 因子を「同調性」因子と命名した。また、「(逆転項目)私は、人見知りをする」の項目は因子負荷量が -.36 であった。

次に第3因子は4項目で構成されており、「私は、真面目である」、「私は、自分が約束を破ることは耐えられない」、「私は誠実でいることが大切だと考える」など、他者に対して誠実に対処しようとする性質を示す項目が高い因子負荷量を示していた。よって、第3因子を「誠実性」因子と命名した。

次に第4因子は5項目で構成されており、「(逆転項目)私は、つらいことがあると人前でも泣いてしまう→私は、つらいことがあっても人前で泣くことを我慢できる」、「(逆転項目)私は、自分の思い通りにいかないとイライラする→私は、自分の思い通りに行かなくてもイライラするのを我慢できる」など、他者の中で負の感情を我慢できる能力を持っていることを示す項目が高い因子負荷量を示していた。よって、第4因子を「感情コントロール」因子と命名した。また、Promax 回転後の因子パターンを表4に示した。

表4. 友人が多い人物尺度の因子分析結果(Promax 回転後の因子パターン、N=102、★印は逆転項目を示す)

	項目内容	I	II	III	IV
社交性	私は、ハキハキと話す。	.64	-.02	-.07	.02
12項目	私は、リーダーシップをとるのが好きである。	.62	.17	-.19	-.06
$\alpha = .81$	私は、笑顔であることが多い。	.61	.04	-.01	-.05
	私は、どんな人にも優しくできる。	.58	-.05	.04	-.05
	私は、その場にあった感情表現ができる。	.53	-.03	.13	-.14
	私は、自分の意見を言うことができる。	.51	-.13	-.11	-.01
	私は、気遣いができる。	.51	.06	.22	.11
	私は、友達の感情を割とよく感じとる。	.48	.09	.10	.00
	私は、聞き上手である。	.47	-.02	-.14	.07
	私は、初対面の人と気兼ねなく話すことができる。	.46	-.04	-.06	-.08
	私は、よく相談に乗る。	.43	.02	-.04	-.03
	私は、物事を論理的に対処できる。	.36	.00	.12	.00
同調性	★私は、約束を破られたらどんな理由があっても許せない。	-.09	.75	.01	.05
8項目	★私は、人の気持ちを理解することができない。	.16	.74	-.10	.04
$\alpha = .67$	私は、友達との約束があっても恋人との約束を優先させる。	.03	.68	-.08	-.07
	★私は、友達からの相談事はめんどくさいと考える。	.49	.63	.00	.02
	★私は、人の意見を聞かず自分の意見を優先する。	-.05	.61	.09	.22
	★私は、友達が困っていても、私には関係ないと思うときがある。	.04	.43	-.11	.04
	★私は、友達といるときに自分の感情を抑えられないことがある。	.05	.37	-.08	.18
	★私は、人見知りをする。	.26	-.36	-.25	.27
誠実性	私は、真面目である。	.23	-.18	.67	-.10
4項目	私は、自分が約束を破ることは耐えられない。	-.09	-.10	.57	.18
$\alpha = .67$	私は、周りとの調和が乱れないようにする。	.05	-.03	.48	.05
	私は、誠実でいることが大切だと考える。	.23	-.01	.47	.01
感情コントロール	★私は、つらいことがあると人前でも泣いてしまう。	-.10	.23	.06	.60
5項目	★私は、つらいことがあると他人の力に頼りすぎる。	.06	.20	.08	.56
$\alpha = .63$	★私は、主観的(自己中心的)に物事をみる。	-.09	.10	.04	.55
	★私は、人の意見に流されやすい。	.14	-.21	-.23	.43
	★私は、自分の思い通りにいかないとイライラする。	.02	-.29	-.01	.43
	累積寄与率	11.06	19.35	24.39	28.60
	因子間相関				
		I	II	III	IV
	I	1.00	-.15	.13	.16
	II	—	1.00	.14	-.17
	III	—	—	1.00	.00
	IV	—	—	—	1.00

## 2. 女子大学生の友人が多い人物尺度の分析(平均値・SD・ $\alpha$ 係数)

女子大学生の友人が多い人物尺度の下位尺度の平均値・SDを算出すると、「社交性」因子下位尺度得点(平均値=3.32、SD=.59)、「同調性」因子下位尺度得点(平均値=3.16、SD=.70)、「誠実性」因子下位尺度得点(平均値=3.75、SD=.67)、「感情コントロール」因子下位尺度得点(平均値=2.85、SD=.76)であった。また、各下位尺度の $\alpha$ 係数と算出すると、「社交性」で $\alpha$ =.81、「同調性」で $\alpha$ =.67、「誠実性」で $\alpha$ =.67、「感情コントロール」で $\alpha$ =.63で「社交性」は $\alpha$ =.80以上、その他は $\alpha$ =.60以上であった。 $\alpha$ =.80以上が望ましいがN=102と回答数が少なかった為、今回は $\alpha$ =.60以上で十分な内的整合性があると判断した。

また、女子大学生の友人が多い人物尺度の下位尺度の平均値・SD・ $\alpha$ 係数を表5に示した。

表5. 女子大学生の友人が多い人物尺度の下位尺度の平均値・SD・ $\alpha$ 係数

	平均値	SD	$\alpha$ 係数
社交性	3.32	.59	.81
同調性	3.16	.70	.67
誠実性	3.75	.67	.67
感情コントロール	2.85	.76	.63

## 3. 女子大学生の友人が多い人物尺度と孤独感尺度の相関

女子大生の友人が多い人物尺度と孤独感尺度の相関関係を確認するため、友人が多い人物尺度の4つの下位尺度と孤独感尺度の相関係数を算出した。その結果、「孤独感尺度」と「社交性」の間に $r=-.24$ で5%水準においてやや強い負の相関がみられた。また、「孤独感尺度」と「同調性」の間に $r=-.44$ で1%水準において強い負の相関がみられ、「社交性」と「誠実性」の間に $r=.24$ で5%水準においてやや強い正の相関がみられた。

また、女子大生の友人が多い人物尺度と孤独感尺度の相関関係を表6に示した。

表6. 女子大生の友人が多い人物尺度と孤独感尺度の相関関係

	孤独感	社交性	同調性	誠実性	感情コントロール	平均値	SD	$\alpha$ 係数
孤独感	—	-.24*	-.44**	.10	.18	2.14	.38	
社交性		—	-.01	.24*	.10	3.32	.59	.81
同調性			—	-.06	.01	3.16	.07	.67
誠実性				—	.05	3.75	.67	.67
感情コントロール					—	2.85	.76	.63

\*  $p < .05$     \*\*  $p < .01$

## 4. 女子大学生の友人が多い人物尺度とあいさつのタイプの関連

まず、A「道で全く知らない人に自分からあいさつする」、B「道で全く知らない人からあいさつされたらあいさつを返す」の2項目の質問をタイプ分けした結果、タイプⅠ=能動型(N=26)、タイプⅡ=矛盾型(N=2)、タイプⅢ=受動型(N=69)、タイプⅣ=拒否型(N=5)に分かれた。このうち、矛盾する矛盾型を除外した。また、拒否型は回答数5つと少なかったので除外した。

次に能動型と受動型の平均値・SDを算出し、能動型と受動型を用いて女子大生の友人の数とあいさつのタイプが関連を調べるためにt検定を行った。その結果、能動型(社会性:平均値=3.40、SD=.13、同調性:平均値=3.32、SD=.15、誠実性:平均値=3.90、SD=.14、感情コントロール:平均値=2.90、SD=.15)、受動型(社会性:平均値=3.27、SD=.07、同調性:平均値=3.12、SD=.08、誠実性:平均値=3.69、SD=.08、感情コントロール:平均値=2.80、SD=.09)であり、「誠実性」因子で10%水準において差がみられた。よって能動型と受動型では友人の数に有意傾向がみられた。また、能動型と受動型のt検定と平均値・SDを表7に示した。

表7. 能動型と受動型の t 検定と平均値・SD (I 能動型:N=26、III受動型:N=69)

	タイプ	有意確率	t 値	平均値	SD
社交性	I 能動型	.44	.98	3.40	.13
	III受動型		.90	3.27	.07
同調性	I	.57	1.24	3.32	.15
	III		1.17	3.12	.08
誠実性	I	.07	1.40	3.90	.14
	III		1.29	3.69	.08
感情コントロール	I	.72	.59	2.90	.15
	III		.60	2.80	.09

### 考察

まず、第2因子の「(逆転項目)私は、人見知りをする」の項目は因子負荷量が-.36で負の因子負荷量であった。「私は人見知りをする」の項目は逆転項目なので、人見知りをするほど「同調性」因子が高くなることを示している。このような結果になった要因は人見知りをする人ほど他者意識が強く、他者に対して配慮しながら行動する傾向があるからだと考えられる。この他者への配慮が「同調性」につながったため、人見知りをするほど「同調性」因子が高くなるという結果になったと考えられる。

次に「孤独感尺度」と「社交性」の間で5%水準においてやや強い負の相関がみられた。この結果から社交性が高いほど孤独感が低くなる傾向があることが分かった。これは社交性が高いほどどんな人とでも話ができて友人関係を作りやすいので社交性の低い人よりも多くの人と関わりを持つことができ、その結果として孤独感を感じることが少なくなるからだと考えられる。また、「孤独感尺度」と「同調性」の間で1%水準において強い負の相関がみられた。この結果から同調性が高いほど孤独感が低くなる傾向があると分かった。同調性の高い人は対人関係において相手のことを配慮したり感情や考えなどを合わせることができ、逆に同調性の低い人は相手のことをあまり気にせず自分の感情や考えなどを相手に合わすことは苦手であると考えられる。よって同調性が高いほど多くの人と関わりを持ち、その関係を維持することができるので孤独感を感じることは少なくなり、同調性が高いほど孤独感が低くなる傾向があると考えられる。また、「社交性」と「誠実性」の間で5%水準においてやや強い正の相関がみられた。この結果から誠実性が高いほど社交性が高くなると分かった。「誠実性」の質問項目は「自分が約束を破ることは耐えられない」、「誠実であることが大切だと考える」、「調和が乱れないようにする」など対人関係において真面目で誠実であろうとする姿勢が伺える内容である。そして、これらの項目が当てはまらない人物像をイメージすると社交的であるとも言い難い人物像になると考えられる。よって社交性と誠実性は表裏一体の関係であると考えられ、正の相関がみられたのではないかと考えられる。

「誠実性」と「孤独感」、「感情コントロール」と「孤独感」に相関がみられなかったが、これらの結果から友人が多いほど孤独感は弱くなる傾向があるといえるのではないかと考えられる。よって、「友人が多いほど孤独感は弱くなる」という仮説は断定はできないが肯定できるものであると考えられる。

次に能動型と受動型で t 検定を行った結果、「誠実性」因子で10%水準において差がみられ、能動型と受動型では友人の数に有意傾向がみられた。また、能動型と受動型の「社交性」・「同調性」・「誠実性」・「感情コントロール」の平均値は全て能動型>受動型であった。よって、受動型よりも能動型のほうが友人が多くなる傾向があるといえるのではないかと考えられる。これはあいさつを自分からできる能動型の人のほうが受動型の人よりも円滑に友人関係を構築しやすいため、友人の数が多くなる傾向があるからではないかと考えられる。また、今回の調査では拒否型のサンプル数が N=5 と少なかったため分析から除外した。そのため、「友人の数は“能動型>受動型>拒否型”」という仮説は検証できなかった。

これらの結果より、「友人が多いほど孤独感は弱くなる」と仮説は断定はできないが肯定できるものであると考えられる。また、今回の調査では拒否型のサンプル数が N=5 と少なかったため「友人の数は“能動型>受動型>拒否型”」という仮説は検証できなかったが、「友人の数は“能動型>受動型”」の傾向があるといえるのではないかと考えられる。

## 今後の課題

今回の調査では「友人の数は“能動型>受動型>拒否型”」という仮説を検証することができなかった。これは調査対象者が女子大学に通う大学生だけであり、またサンプル数が少なかったためデータに偏りがあったため検証できなかったと考えられる。そのため、調査対象の幅を広くして多くのサンプルと各あいさつ型(4タイプ)のサンプルが十分に取れるようにすることが今後の課題の1つであると考えられる。また、今回は時間がなかったためA「道で全く知らない人に自分からあいさつする」、B「道で全く知らない人からあいさつされたらあいさつを返す」という2項目を4件法で質問し、「あいさつする群」と「あいさつしない群」の2分類で分け、A「道で全く知らない人に自分からあいさつする」にあいさつすると答えた群を「能動的あいさつ群」、B「道で全く知らない人からあいさつされたらあいさつを返す」のみにあいさつすると答えた群を「受動的あいさつ群」として「友人が多い - 能動的あいさつ群」、「友人が多い - 受動的あいさつ群」、「友人が少ない - 能動的あいさつを群」、「友人が少ない - 受動的あいさつ群」の4群に分け、改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版(諸井, 1991)を用いて孤独感に相違があるかの分析をすることができなかった。そして、今回の調査では「友人が多いほど孤独感は弱くなる」という仮説は肯定できるものであると分かったが、近年の青年期の友人関係の特徴は千石・鐘ヶ江・佐藤(1987)によればわざわざ関係に巻き込まれることを恐れ友人関係に深入りしないことがあげられ、小此木(1984)によれば表面上は人当たり良く素直であるが、自己を失う不安が強いので深く関わらないことがあげられる。また、藤井(2001)は大学生の友人関係における心理的距離のとり方の特徴を近づいたり遠ざかったりを柔軟に繰り返す距離のとり方を理想としながら、現実「お互いに深く関わって相手の心を理解するやさしさ」と「滑らかな関係を維持するためお互いを傷つけないやさしさ」が混同して表面的な関係を維持するためにトラブルを回避することを柔軟な関係であると誤認する傾向があると指摘している。このようなことから友人が多いからといって必ずしも孤独感が少ないとは断言できず、むしろ最近の傾向としては、気遣いや調和を重んじて受動的な友人関係を多く築いている人のほうが孤独感が強いのではないかという仮説が考えられる。よって、今回分析できなかったものを分析し、この仮説を検証することが今後の課題の1つであると考えられる。

## 引用文献

- 藤井 恭子 (2001). 大学生における友人関係における心理的距離のとり方 茨城県立医療大学(編) 茨城県立医療大学紀要, **6**, 69 - 78.
- 高坂 康雄 (2010). 大学生における同姓友人, 異性友人, 恋人に対する期待の比較 日本パーソナリティ心理学会(編) パーソナリティ研究, **18(2)**, 140-151.
- 諸井 克英 (1991). 改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討 静岡大学文学部人文論集, **42**, 23-51.
- 野村 雅一 (1988). 世界大百科 1 下中 弘(編) 平凡社 16 - 17.
- 小此木 啓吾 (1984). 現代青年への視覚—精神分析学的青年論 青年心理, **43**, 156 - 176.
- 千石 保・鐘ヶ江 晴彦・佐藤 郡衛 (1987). 日本の中学生—国際比較でみる 日本放送出版協会
- 高橋 六二 (2008). 禅の「挨拶」—「あいさつ」の発生(2) 跡見学園女子大学文学部コミュニケーション学科(編) コミュニケーション文化, **2**, 75 - 87.
- 高橋 六二 (2009). 俗世の「挨拶」—「あいさつ」の発生(3) 跡見学園女子大学文学部コミュニケーション学科(編) コミュニケーション文化, **3**, 45 - 53.
- 山根 薫 (1960). 高校生のもつ理想的人物像(Ⅱ)—友人像— 日本教育心理学協会(編) 教育心理学研究, **8(3/4)**, 68.